

## 松木日向緑地プログラム 竹林整備＋体験企画

連携団体

ひなた緑地遊学会

特別連携

加藤英寿先生（理学部生命科学科）  
「多摩の里山学」受講生

2021年12月4日（土）

### 報告

#### 竹の利活用を考える

朝が冷え込んだ12月4日（土）、2021年度5回目の地域ボランティアプログラム「日向緑地ボランティアプログラム」が始まりました。

本プログラムは、都立大・南大沢キャンパス内にある松木日向緑地をフィールドとして、里山の荒廃による生態系への影響（環境的課題）・自然利用の技術・文化の伝承の断絶（文化的課題）・本学が有する豊かな資源に対する認知度の低さ（本学の課題）の社会課題の解決に向け、里山保全・多世代交流活動に取り組んでいます。

今回は、参加学生7名に加え、理学部生命科学科の加藤英寿先生の後期授業「多摩の里山学」の受講生と共に、連携団体である「ひなた緑地遊学会」の方々にもご指導いただきながら、松木日向緑地の東側エリアで、「孟宗竹（モウソウチク）」の間伐を実施しました。

集まった参加者は、今回も引き続き、消毒やマスクの着用など感染対策を徹底し、準備運動を行った上で活動を行います。

活動開始前に、里山学の受講生と共に、加藤先生より「竹の利活用」について学びます。

先生が見せてくださったのは“竹パウダー”。竹を粉碎する機械で粉々になった「孟宗竹」です。“竹パウダー”を生ごみ攪拌機に入れると、数日で生ごみが分解され、匂いも消えるそうです。一方で、竹の利活用が進まない問題として、処理面の大変さが挙げられることも学びました。



▲ 竹の利活用事例について学ぶ学生



▲ “竹パウダー”



#### 今回の活動場所



首都大学東京・東京都立大学 ひなたブック製作委員会『ひなたブック』, 2007より

#### 間伐方法の伝授

「孟宗竹」の竹林整備について、加藤先生より改めて学びます。

①両手を広げてぶつからないくらいの間隔で竹が生えていることが望ましい

②将来、竹林をどのようにしたいか（どこを生かしておきたいか）を考えながら間伐をすること

加藤先生のお話を聞き、参加学生も改めて竹林整備の在り方を見直す機会となり、間伐作業の目的や将来の姿を考えていました。

今回は参加学生のほとんどが複数回の竹林整備の活動経験があったことから、今回は知識を伝授する側になりました。里山学の受講生とチームを組み、里山学の受講生に間伐するための見定め方や鋸の使い方、間伐時の注意等を伝えます。今回は足元が不安定な急斜面での活動でしたので、足元に十分留意しながら、作業を進めました。

密集した竹を切って太陽光が入ってくると「おお！明るくなった！」との声。「（間伐前と比べ）こんなに違うとは思わなかった」「思ったより竹を切ったという充実感が得られて楽しかった」という感想が多く聞かれました。

今後も引き続き、間伐後の竹林の将来を考えながら作業を行っていき、タケノコ掘りが安全にできる環境を目指します。



都立大ボラセン  
YouTubeチャンネル

当日の様子を公開中！